

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 JAPAN

遺拾

江戸攷子

立

卷之五

名木類聚

松樹

梅樹

接樹

羅樹

附編題并十仲間

藥品衆方

醫家靈藥

諸家貢藥

四時遊觀

春夏秋冬景物記

附錄

松類聚

特別
九四
3228
11

房
門號 3228
卷 11

續江戸砂子温故名跡志卷之五

菊岡沾涼纂



一 名木類聚

一 松樹 二 梅樹 三 櫻樹 四 雜擇

附 漏刻
十時間

二 藥品衆方

醫家靈方 諸家賈藥

三 四時遊觀

春夏秋冬景物の地

附 携舟類聚

昭和三十九年六月九日購求

綱之序

1

三

松柏爲白木長而守門閭 史記龜策傳見○松、柏、久、之、春、夏
松柏同本一脉也。松者，木也。柏者，木也。通音也。令壁事類
松二二卦

卷之二

一
鉤

二
樹
部

○○
龍海橋

龜子
楊萬里書

卷之三

清華文選

閩學家集

西南氣流
系の梅樹

大鏡

卷云村上帝天王
是時代今櫻

某人有之奉て云西京某家の物あつた所く
時其色深く其香濃なり是甚遇す極きるもの茲に
かゆて人をもすを御し、其の女云枝子姫母也是
著ては柳樹を触るといひ、繩送りの事至上偶
實を覽む事ありし被あ

勅の事と云ひて、主の名ばかりさういふ事
其主の女何人すらりと向ひ其名の
人前まで云附紀賀えりと申す者也
と云ふ其の姓は阿波守あり。而後足利義嗣
被充許也

走く其毛は拂ひ難いを應二の乳の後は拂ひ難き極也
の事。す極を方丈の御前拂ふ極。今於此せり。拂
無事も拂耳。其色紅あり。其香至て
濃しけ程。至ることの有。之せるもの。

増本殿世の梅 田舎廻院。す。葉。一。枝。根。枝。下
の。根。の。叶。の。東。一。加。木。の。根。一。朝。根。枝。下

増宗の梅 牛込宗泰寺。之。園。之。春。宗。和。の。梅。也。
梅。ハ。其。名。色。形。容。百。紙。の。ま。ま。て。う。故。よ。花。中。才。之。
未。同。之。る。財。色。紅。な。り。因。之。後。波。一。之。後。根。也。後。山。房。内。
の。名。度。し。所。海。し。も。根。新。あ。る。一。实。大。キ。子。し。其。英。く。子。至。
斯。根。く。と。千。梅。を。勢。す。又。の。走。く。る。を。根。換。し。れ。總。根。と。之。六。
ひ。く。く。か。ら。の。く。八。堂。し。の。度。論。根。八。童。し。の。根。也。杏。深。

衣一處。よ。か。ゆ。く。ひ。く。來。す。文。ち。一。ほ。そ。り。あ。い。そ。度。と。く。り。字
仰。一。胆。水。梅。八。き。げ。て。看。あ。く。瓦。し。ら。下。つ。じ。一。山。す。よ
眾。根。よ。う。れ。か。そ。一。の。好。文。本。ハ。彩。另。し。去。よ。と。ト。と。修。す
好。文。本。と。称。する。ハ。梅。の。香。の。生。よ。ど。と。ち。よ。ア
題。依。風。知。梅。帆。の。腹。一。根。の。あ。ま。く。れ。都。多。

笠。卉。魚。路。

梅樹の部

東。塵。草。集。す。す。

- 吉野根 上野の梅
- 糸根 上野慈眼堂
- 石枝根 谷中幽林ち
- 母衣根 和泉の梅
- 増地竈 岩田天神
- 金王根 澄谷八幡
- 彦根 梅村
- 彦根の梅 岩上寺の曾以久
- 増益平根 増益平根
- 京根 越谷氏盛の梅

增定古今圖書集成

不以爲奇

卷之三

大藏書

增泰山府君稿 三四松平生
盛衰記 云極所中納言院危つゝ
奉と府君の祀りを以て之より
神靈莫様 谷中威勢もあれ
八室仰て幕者

根、本邦未一叢教の花と申す

卷之三

山櫻發欲然
三果木名花朱

後漢書卷之三
司馬溫公著

紅櫻零落杏花開
葉在枝上極少
未可謂之桃樹
中之承子也至刻木梓
雖以之勒題子之有之
一也朝辭暮歸漂泊
似其本之形也向言之云二月流紅自
花之來下之多之極、確數
之被譽梅客
之極矣元小之也同葉之生之青紫之樣
十餘日早

城邑
之
人
極
不
能
以
力
而
死

本居宣長集

の名と云ふ。雲珠橋

しらゆめへ師
義姫の

28 畠のさくらんぼ 宮澤よりあ
了雲

日蓮宗の書

天皇崩御の後は、徳川家宣の通脇の
謀叛の爲め、江戸に逃亡した。

農業の本道

今旅は遍路の宿泊し素性は仰、参旅
へ室宿

子の帝、仁祖帝也

少様ありませうとく
少男

垂絲海棠

卷之三

卷之二

大橋
花橋子
久松
朝

もが別よ
もじ

雙谷様
吉野様
ひく様
東立、室之
持て候てめりの屋の

（もよろび）

四 雜樹の部

質掛櫟

上野御船荷

衣装櫻

王木材

印の根

晒波の木

駕籠通櫻

日向不動

太平櫻

龜子櫻

道灌毛桺

毛磨毛恵亭の木

補神木櫻

印の柳

鶴躑柳

毛磨毛恵亭の木

楊枝櫻

支那柳

麻布若狭

麻布若狭

杖根櫻

支那柳

千歳柳

下川東海寺

黒幕

麻布若狭

千歳柳

相生樟

小村井

汗蒸森の木本

汗蒸森の木本

神相生樟

小村井

汗蒸森の木本

汗蒸森の木本

入楓

三田松平

入楓

汗蒸森の木本

羅ふ子

東洋集

羅ふ子

汗蒸森の木本

入楓

入楓

羅ふ子

汗蒸森の木本

根の木

天井の木

根の木

汗蒸森の木本

根の木

天井の

増 庭 竹

淺草寺篤谷橋所傍傍いと古傳跡の名據四井天山
の水石流の所し森をよめきてもじ樹のすみに、植えり時
總不社の堂可見性が多しく、我の森をいわてゆき樹の
そとすみやす元の地へとまゝとらの事あらず
かくのよひうきの樹のをかずの不つて樹のいはれ
かくは枝の枝葉に人を來らむとぞりは蓋今より船走

○高尾山紅葉 千年の西方寺

○真間紅葉 真間法蓮

○海晏寺紅葉 砥川

○正龍寺紅葉 砥川

下谷

○夕照山紅葉 砥川

○正龍寺紅葉 砥川

下谷

○御葉の芦 明治

○行葉の芦 はるひ

御葉

○紳の秋行葉 舟瀬本坊

○葉平竹 安田平夫作

○増影向竹 上野中堂の音の聲

○増音葉の紅葉 朝日

竹

○増音葉の紅葉 朝日

○行葉の芦 はるひ

御葉

ノクノリ一を信教大師ねあらひ歓び中堂の声。極ち外
を東敷ゆきつもととととと又信教大師のねあらひ歓
の三國傳の竹ハ比歓ふ竹極流すあらとつづけ新経と
ツハ葉のさなれ九く御坐なきやして常の竹紫しき美
増音葉の紅葉 虎の門内本郷別懶庵ぬきも
は極ひ来せばあらひ御葉のさなれと称れ寛永から御葉の
きくを御よとし是あ謂は大ゆる施換も

○江都二六時牛の鐘

▲上野大佛の赤

▲浅草寺弁天山 ▲本石町三丁目

▲市谷八幡隨身門

▲舍海山青松寺 ▲本所横川

▲坂神通寺の鐘ハ西年六時の鶴もるる

江府十組諸問屋 十仲間

本和氣町

大橋通所 一丁目二丁目

日中橋南一丁目二丁目四丁目

日中橋小一丁目

神田橋東橋北成通油町

本町四丁目

本町三丁目

本町西二丁目或大橋通所

南端萬國手西門子物語

酒向町

大竹支二丁目紀文の收善より動る又之極印より不あう鴻松平彌
表極印を表 極極印を是へ上方出板の而以て其の母を
改めテ名前を入母の字に十仲間より酒之酒仲名を改めモ

二 藥品衆方

江都・扶桑寂上の津樂家林の他に 官醫名醫全
ノ・獨人の急を救ひの名方良藥并而子漢ノ其醫術乃
門ノ・名方秘方ありと云ふ事多々今其大概を舉
○龍腦丸 官醫半井家亟方 本名和氣

尚友の祖和氣弘世・清麻呂の長子も文章生れ補せき
大學の列あると後儒よ會して陰陽の書を篠倫・刺子
藥經大素寫を櫻毛弘世の長子時雨久平より醫術
學すと承平三年七月醫博士の號を賜ふ又鍼博士と称
ふ其號は半井の字也ハ元京島丸中立堂の小姓也
又大井あり其中間を隔て半井に製藥の神少ぬひ半井
薬用に充ふもすよつて半井の號あり 雍州府志

○唐蘿白散

官醫今大路家靈方

宇多源氏佐木

丹波氏の祖康賴、後漢靈帝の末裔と元丹波國矢田郡
藏怪士を歷醫術。神妙す通じ慶養宇宙に傳
永歿二年十一月廿八日醫心方三十卷を承り。是より後未詳。康
其裔魚康明醫學の卷を得。是より後未詳。康子小
室、丹波姓して氏を小室と号ひ。後醫術
妻へ三十石の禄を給ふ。乞を廢し。每月一
度蘇白散并度障散を製。禁裏院中且官
指合曲直潔道三丹家の例を繼ぐ。家と號ひ。雅州府志
舊記二屠之穢の屠の字を一加て唐と云。尸の字
を忌く點を加へ是す即の故實也。

○延壽丹

右同家良方

曲直潔道三十字。漢別號雖知苦亦其子延壽院玄朔

○船底散舟を製舊人を制

以上雍州府志

○鳳髓丹

官醫吉田家靈方

治中風痰喘息咳嗽虫積疝氣腹痛胸痛霍亂
吐逆食傷諸毒解。疫癆止。

○延壽丹

官醫吉田快隆家方

治中風痰喘息咳嗽虫積疝氣腹痛胸痛霍亂
吐逆食傷諸毒解。疫癆止。

吉田家へ延壽丹傳。本二郎秀義二男六郎廉秀、九郎
と吉田子文く写る。未高吉田。極も八世孫。延壽
國を去り洛陽を到了。廣死相不。又義持。又
廉秀。傳。法印。數。盛方院の號を貪ふ。其の
豊臣秀吉。云々。法印。數。盛方院の號を貪ふ。其の
間龍舟世よ通く。誠不。或統。延壽の又天龍寺葉秀
の子。之入。延壽。二字あり。是れ意。水利。清秀
意。卷宗物。皆醫術をつ。

雍州府志

○牛黃丸并保童圓

官醫竹田家靈方 刑部卿法印

同院太政大臣公季公八世の裔公經公の子竹田清水答中納言
公定卿十四代の孫昌慶少佐と称せ船之醫術を
そく竹田家の祖と未齋代官醫靈方牛黃丸正製

○枇杷葉湯

官醫國庫伯典家方

效驗世々傳下世俗伯典心少也

○神仙丸

官醫久志本神方

日本指南二目

卷之三

才一食毒藥毒魚毒菌毒解食傷酒毒害之苦之甚者而
之死也鳥獸のれの水にて牛馬のれの苦い水を以ひて之を
此經末天照太神の御靈想と云毛然卒に伊勢度會郡の名物よ神
假久志本とあら太林の處

○龍王湯

仙臺作家方

藤堂河家方

赤井家良方

○赤松丹

今川家良家世

今川の赤糸と称毛馬の病を治ス

○黑香

細川所家方

立香湯

王子令輪寺

地元丸

生本草集解通鑑

○返魂丹

小門東福寺

鶴丸丸

式列橋本光明寺

○返魂丹

小門東福寺

地元丸

生本草集解通鑑

○返魂丹

○武威堂丸

醫秦姓川勝春菴成長製 神田松下助代地

帶二人立粧 功徳 五兵白刃の難を除 虎狼の夷の蠍虫を避疫病除
戸上よ掛 盗賊入ハレ 春菴祖又川揚高弟を封底治 扱列すお帶
西忍く友人 西忍大明スヘ 景初より董大丸の口文を以テ成ル
松下の事よ属 村上某と開系す而テ附日比猛烈る氣質
西忍董大丸をあくよ陣中すが故に村上魁深ノ敵而勝手に
あくよ成ル一編を今切定シ甲首年老 村上を以テ退財
天雨の事トニ二勝とすを強烈にて退くまひとす董大丸の
奇恵を附す後治軍の威状今より存モ此陣の後西忍に董
丸を口宣一代、御食甚歟く 嵩山一陽系後帝と公卿合モ

○董大丸

もと元朝二丁目 成治大隅榮

○手握丸

醫田村宗宣製

神田松下助三丁目

齋よ臨し財産歸け一粒を服モ其生も子孫も幸を
掛く進む破す安産丸とすより後御本牧の神古シ

○生榮湯

益堂家醫和氣の門生久木田固菴製

柳川

えせんさんこきんそくよろくの失血の神めで毛利家法母よ董

○還童丸

ニヤウ 醫谷口一栗製 一疵も痘瘡也病脾胃の弱者

立派を浦ひ軽神をすく一粒を服モ耳目をあきらめず

○錦袋園

此の事、被多者大助一元祖三郎以通し、嘸國の人々

歌謡を以テ、和列長令すじゆく指丸を立らしの血を

詠歌を書写す。其後一臘經とす。儒醫の書藉を承め宇治

黄蘿山の經義を造立。小口を納じて後に都に之の學子
往。被袋翁を仰命す。その續の余慶を以テ一切經をともぬ

篠津の井天の經義を達して手を納じて後に都に之の學子
往。被袋翁を仰命す。其の余慶を以テ一切經をともぬ

茶の傳ひ其全慶。年々之を治若葉等の事と仰命す。

○葉王丸

吉田元吉通葉王堂萬永製 一氣力を至極を發揮す

腎水を主ひ本體大補湯より其の如く。を不敷品の如く

卷之二

二

○女宝丹 鶴からぬ 菊岡喜三製 △那人一切の良薬也 男婦人陰
オ一匁水ふ水なりにゆくと血のたぐらをしるべはとん草そそら
ほんりゆきまのを身うちひして婦人のがいす甚め
此仙茶ハ根生かの靈方也 て慶安のころ御内中の官めにゆけ
效能あり 女一文者も内親王也 廣賛にあらう 良方也

○清醒散

右同家 △酒毒を解せ半病更しけ業少用有
時ハ何物の入ても確幸ゆく吐き止のり 又酒の毒れを多辟

○立庵妙功丸

鶴山奇中散 麦門莖茶 麻田前醫小村東巴
誠ニ方へ大川を宗室帝の勅製く 費氏秀吉云 鞍鑓追清

シ附二の因よ遼東ますとひよみの卒よ因氏とよ醫也

小村の祖東馬惣重好よ因清てひよみ在あり 小兒の良方あり
誠すすまかよ其方を授與もとどく代少村の痴方也

○七宝義算丹 十駄店 因肥後製 △活虛を補ひひくも
多んぞきアキアキアキモドコ キムシリ 其不取品ゆき

○黃蘗枸杞子丸

白井治兵衛製 △輕力減省 功能取品

○王壺丹

日本 檀村茂白製 △氣血アキアキモドコ 其不取品

○一粒金丹

薄荷 甘草 利木の氣虚を補ひ活氣を養

○還真丸

10町 光浦源九の製 △活虛を補ひ骨をす

中丸多へつへきよらく

泡も時事アキアキモドコ ヒゲアキモドコ 薔薇

○牛丸清内吉基元

返青丸 脾胃之補益之至 室町對之慈也

○潤劑丸

立原嘉之製 △烏犀國 鳥三元セラ吉
薬湯を墨子目 武井道に製を品甲列 △鳥之つけ 田川

○天道風丹

アキアキモドコ を全明ガ實添也 川上松葉製

○黑瞳散

大久保毛利村 佐渡勘定房 岩居詠山附

小火土疳の妙茶也 其不取品あり 世人の良薬也

○解瘀丸 七店吉川行 經絡有源丸 ○万金丹 六通之苗萬一力薦於八
○处卒散定丸 通三日 全身や逐萬 ○免絲子内 株室アセイシイニ 雜敷
○木杏丸 芝令枚 球井休菴 ○木杏丸 芝淡松 松路玄奇
○巨勝子 至全所 若林宗哲 ハサク 中川 ラムヒヤシ 佐々木
○同 連田ニスユ 大坂深宗貞萬 西坂仁義 ナカツシマツヨウモン
○鳴通丸 一名達丸 今手 アシタ 五味 ウメ 口中一切のうひを
开 アキテ 加補丸 アシタ 人之身より一す アキテ 痘瘍 アシタ よきめく きのんせまひ身アキテ
大雄丸 一牙一磨擦 亂首 アシタ 血首 アシタ 血のひつへとすとあく切り
相列 大雄山 宝天寺道了橋吸毒因神方鑑門白水裳
○益寿不老丹 一氣トシテ 久之而 アシタ ひきよとびり アシタ 一年一切
中内ト血痔 アシタ 一けふらをし アシタ 其外にあく日中門格が毒藥也

○日 育母 菊園修氣 アシタ ヨシイヌ アシタ 大和薬市氣
○外郎遙頂香 ハ禮部貟外郎陳家教 云合列の裏て
東西の流の遙頂香 ハけ未齋 し相列小西系の年月ハ以降流し
○目菜の部 馬鹿目菜 笠原良景 アシタ 松田同素 皆官醫なり
○淡室東光院 医王院 目菜
○吉岡目菜 石町 醫 吉岡久清 アシタ 久森目菜 立全 アシタ 支那周安
○雲切散 是檜南ニメ安田松折 アシタ 久森目菜 唐敷 アシタ 周益
○五亞香 本断丁目 益田三泰 アシタ 元山原の全寒水草中には古歌弘之
○菊附散 アシタ 伊田坪井浦眼 醫 元甲別の坐明庵の歌に歌ふ

三
四
時
遊
觀

○梅
龜戸天神東三町於掘反敷清香薔
薇
枝もい都
也一のシテ木く其枝

卷之三

の席より九日午後二時より下板より中二ろ
八車ともむし一ノ板をトヤマシカなると有り

題梅屋敷

門番より海月にさだら梅松屋

栗本雪朝

題臥龍橋

有分にせようする梅の肌

河津玉賀

董鶴

根岸の里

東獻山北の林なり

九國東北佐島の寺よりもあくまくとひき星の寺
元総のころ 岬に金松つると多めくすとあくまく落葉セ
らまく その卯卯木へ朝氣もまくとつ

夫木

考ひゆるの石井すなまくとだくもおひゆくわく

本邦にて新しく称する報春島

臣女

古ガヤ

あくまくすの芭蕉

椿山

椿山

牛込園口比山茶 水神の社有

けぬを後一向よ移たりは不を仰み移ぐどいのナハ

も移すくやあくまでれ流す云室翁をあおぐ

椿山

椿山

牛込園口比山茶 水神の社有

○花 東獻山 江都陸一死の名とて

毎春の越觀 は呉天の船に 加賀山三室く下ハ楚せの花
徳紙の香詠香 かのよと雲詠けとせく機よとじ吉野
ハシタノ狹 その種ととくらむとくよも園の花はく
アヒル ひ都へ上野と絆 一ノ子

夫木

を育まずおもと姫とへよもすきうる花くらむ

法橋空融

○七面の花 大崖

春時山法善寺 七面の年一ノ子

勝山廣 これもとくせのあくまくすひあくまく
ひきくもの船とくろくろに西向の舟の勝山すはき
ひひとの船を廻りてくろくろ天井のやうの舟ハ谷間の細き
勝山すかのよとくろくろ幕うのすくわくでそのあ
七面の場向うひあくまくほくまく幕じ櫻のと民多
増子本楊 浮草ます本堂おうろ

アヒルのと 蔽とひまきと桜樹と拂り枝て宣のまをながむ

春來却作宴遊地圖國壯觀千樹櫻と作る中室の
きうどんをくらべておののこよしのれと船
その舟よかく北方の佳人あく女華するく記せう大悲
の美色そくはまほめておもとだせ初秋の雪と
千載ぬめとれぬまゆもんじくはくの猿づる深澤
と茶店の隣するまゆもんじくはくの猿づる深澤

題新梅樹 色も色極人も枯人をねばり 中田川末石

○花

龜島山

玉子と平坂の社の前

なぐれのむきのひに迎年橘樹あゆく極也く里雲
ころハ小松御のまとひて櫻の里も御源石にて牛毛比
かくしゆく頂へまどくの重ねても生やく
人わらせて豊鳴是立いはるよゑりくの流れ白布と
ひびてまへ帆片帆いねのまくらすよだぐを流奈利
林洞發酒 らきの雪て耕せよふさく 中島立貞

○躡躅

塗井 修善修善家産

元祖ノ代ノ麻糸舞櫻邊

唐のあみのあみを賄ふ子年万花おもむくすす
貴傳様の漫うく時子被を布すい無形す五色の雲
高麗ハ薩摩音傳の音あるてじめあく正保年中西野
うち太極一本多くたまふて太極もう五本京都の山も野
富士山櫛角面向無三唐松しづく面す舞櫻の二枝ハ禁庭す
櫛あらじてぐくめの二枝ハ附庸二年庚江深井しづく面す
面向根まつは木大無三根まつは木大唐松根まつは木大
新緑の内唐松ハ拂風うらぎて唐松長脚(拂まつは木大)と喜保二
の一本洋川セ一枝多く 喜保二室ひしりあらわし

題百種楓

水縫や他よりも又名机

當向住
凍龜

○故 鹿児天神宮 檜門の前は直段へ山の上庄屋と相
あり紫白八重の御衣の御子の御子をもて居る今度き
拾送 多賀の浦原まへ向ひ奉波をかうそい食めの久良核を充
○故 細鷦絳香社 神前より方六十金支板枝葉の
なり一曲の木をもり本の下園の蔭茶店多く喫者と
駄馬、並ひ紫白根にてとすあり松列の御香と鹿の御香
お遠 御香の鹿の鹿脇よりの松よまたへ色が早 平蓋盛
い鷦絳に山都のせをもりて草つせう一門が行ふしてひら
ひ鷦絳と鷦絳なり方面間ありと乞鷦絳も源をつ
所とよとよとゆゑども御のき千鷦絳の下石はとく東高の
置く者よ破す漁の書油井 舟宿の風情ありづら二曲と
もあれて十里の漁路も鷦絳ちあまじよなまびくあすや
○故 上野山玉社 無居洋のうのむ居石 無居玉板も
えさう二十間より紫白英を多とてがくもみの仄板あ六

江陽の比叡をうそろふより日吉の平山も門へ御宿わう
けぬか御神御の京ももとへ小多喜の御宿也御宿也中堂
御室御のみきり山口よ遙る城よ築すあるひけりみこと、
玉葉 うやく法のまをとむをうそく禁御の御室御の御室御
○故 根室の室室御の御室御の御室御の御室御の御室御
御室御の色をあらよ いだよ後ねも

御室御の色をあらよ いだよ後ねも

御室御の色をあらよ いだよ後ねも

御室御の色をあらよ いだよ後ねも

○時鳥 高田の里 足跡の林 室泉寺

禪院やとよ足跡の林堂へ小多喜ひひくすみかとせば松
やとくよ、まくらはく、たまうかとくとく御樹へ室室御の
よとくよ、まくらはく、たまうかとくとく御樹へ室室御の

卷之三

三

の時鳥
和もの室
小石川御教會の御役の事と云
松谷町へゆきてはまのかひあつて和室をとゆ
ねむ遠山里のうなづくらにとまくれま
お直の食運法師の肴と山城大京の屋勝が極意のやうに良運の
御供あつて豫子にいきりての食運の肴今にさへゆる
袋草子と今大京有るわよおれと傳れ
御院はまよ下馬はんこかどろきて走とて言て云げ下良運
乃四野なり、そぞ下るせんじんと人威被して駆下す。

時鳥
幸猶苟社
是而有之
舍海山の聲
三嶽山の梢
青葉よみだて

○晴鳥
瀟瀟臺
沙茶水の底
内すくひ本年一
合口裏川

博物志　杜鵑生子　寄之他巢　○
其子之色與母不同　時有赤白者也
此亦可謂之變矣

鶴生子 寄之他巢の巣より生と zwar
ひまかくしの時もあらゆるところの色をみ 西行

まかすの遍照^{まんじゆ}、
まかすの遍照^{まんじゆ}とを
中^{なか}御^ごのへ、ハ杜鵑^{トリヅケ}の聲^{こゑ}を聞^き、事^{こと}を以^うて
なとひ、御^ごのへ、ハ圓^{えん}音^{おと}と爲^{なる}、
都^{みやこ}頓^{とん}室^{むろ}壽^{スズ}とあくとあり

○常
落合
も出体の極より三間より以上
上水口と雜司谷の細流との落合及びあい

家作業のよ鐵、うかがつまとくみのあらわしり事は
おきにきく。一暮月、けく月

題落合堂
東山の里、いすみの風多代
酒井連環

居泉 聖寿 さくらのひよひよとひるみ
あささかしわざれくはもとおもむけ
むすめくらげく

卷之五

二

ぬく夜もよき夜もよきのゆきよきのゆきよきのゆき
よきよきのゆきよきのゆきよきのゆきよきのゆきよきのゆき

○納涼 舞鶴橋 東風の舞岸よ方脚の東の舞
とねり 鶴亭の櫓を船下て盆中坐す。此處夷有
あひ、舞丸桃李は山城をせり波濤の月夜の意を忘る。

題橋上涼風 安房の島やお橋のまよ風の因 菊岡梅五

題兩國橋

楊華先生

虹梁新建枕長流 人是陸行吉在舟
疑似猛龍横臥勢 總州爲尾武爲頭ト
伏古河東萬像那、民列、うりが中皆總列ス尾
故より詩あり今又びりに之ア武陽と呼モト

○船遊山 清草川

蘇南うなり屋船と乗組り、渡く物へ金船の

○船遊山

蘇南うなり屋船と乗組り、渡く物へ金船の

柳の下に園の宿す御、(二伏のちのまづれどももあ
の那夢、刻をひく) 都島の冲洲す御のまづり渴渴の
混くる厚水、荒々と人間の漏も衣すある太陽道士
の根すかく、あらんぐくよ船す) うーあ玉船もよぐくひ
くのうちくみ死火精、(もじらういの多をあさひねく船
とくのうちくみ死火精、) 一強、空すきぬー船朱水底す院じ

○樓船類聚

舟船主

△神田川

浪草橋

桺橋

○吉野九里平左門 持セ ○大福丸三津屋若町四日市
君吉丸また門右衛門 有右衛門 ○花一九三 あは丁 織田
王吉丸三津屋若町三津屋若町 有右衛門 ○太田丸三津屋若町三津屋若町
永樂丸三津屋若町三津屋若町 有右衛門 ○初瀬丸三津屋若町三津屋若町
三國丸三津屋若町三津屋若町 有右衛門

續江戶圖

七

○○○
釣木丸 三
平七郎
鳥音丸 三
右角丁
東國丸 三
右角丁
庄洋郎
建之而
大若丸 三
右角丁
柳丸 三
右角丁
川丸 三
平七
平七
大矢馬

○相摸丸
作參丸
入參丸
○搖丸
九子同生丸

望云采

同水道橋
桺根丸
加喜吉
右内丁

井筒丸
山川丸
右口下
春日

河東先生集

吉屋丸

迎揚鳴

虎丸

長年
久矣

五世九

漢書 駒形
七言律詩

玉市丸
西町 長四郎

尾上九 大吉 王福九

江 戸 橋 清 八

大和丸
内丁
田村丸
今市丸
内丁
内丁

右門下
左門下
右門上
左門上
長子而
流嘯而

今市丸 三ま 左門丁
吉川丸 三ま 左門丁
吉口十郎

大浦里役事

平居
通二日
往來
其來
後

君官九
衣川九
吉野九
山あ山三百
源左衛
七
右内丁
也

市川吉右

卷之二
七
惠山小景
王
庄
書

()
紀代九
志川丁
布吉

大田丸
福歲田丸
宮川丸

石橋

本町河岸

少室山一百八十五處
少室山一百八十五處
少室山一百八十五處
少室山一百八十五處

稻荷橋

堀川

三

7

川東市和川
西同市川泉一
丸丸丸丸丸大

大黒九
留擣

本校丁酉月
達云龍（山吉丸
日二十六
七辰晴

卷之三

○○○○○○○
伊勢一宮神社
吉川八庫
佐羅丸九

深川在四國九川

金松朋彌 仁太郎 川吉丸
○ 岩戸丸 長林町 佐藤
○ 高砂丸 保田永萬 村左衛

以上百艘

卷之三

蘇東坡

紅白荷葉水如波

拾物叢話

荷花を、春のもの雙子の、いはば強し、又時朝向る
すりり入
雨淮 荷へ芝葉

卷之三

其一
其二
其三
其四
其五
其六
其七
其八
其九
其十

題水月

雲外の事
事外の事
事外の事
事外の事

川勝管山

日記

の御天皇は

旅館の手の枕をむきよ

卷之三

秋の匂い都の歌舞伎は
旅館の手枕をむきも食する
支度。朝立ち入り旅の手枕と年々累加さび月が運営する
よしとくとく先月の入居の奉達をもとめ久しく休止中
もぐりひーの都く
琴筑御物の感を體へるが爲の
蕭条する裏。私の手稿の限りもあらわぬ

月のとくをも
葉のひかくはるむ
右大臣
喜田京之

虫撰

かのゆくも
のま

卷之三

紅葉
其の二
本堂の前より一木中の相あり。此名爲輪也。枝枝
葉子生葉を以てぬふせよ。ひわき。四葉。すも。おの葉。

卷之三

補陀山海晏寺

曹伯宗

下川山

春堂の下にあわせ相枕りとて
をまゝりが今小を歌ふに旭の映ト
波間鷺テ紅葉寄興有情人比感物也
○紅葉 東陽山正燈寺 倫家 下谷秋雲

松樹山明院

天台

目 欠 行 人 飯

あさ、丸をうけて夕陽の紅葉夕景のよれをえむる

向
岡

志の下のほのあす
じよ

卷之三

續古今
那きよきよきよきよきよきよきよきよき
母の國のうちよきよきよきよきよきよきよき
今へひくひくひくひくひくひくひく
題雪野

御夷山金輪寺

真言

王子林

第一玉子の社前へ
しきりをとどめ事二里の余より小
あまきよ、ても御樹の木の間より社殿の龕もととして神のまる
いを取れり
は御殿のよくひきする雪すみとてうなづくとめら身ま
禁へて神井川の流すはくちあひにいはく松山市にて
じりのたとすよりぬぬゆのゆきとせんじよつまれる雪モ
おもとひともりく義の雪ももくじく四方を望候也
ちよ雪の一向をはぐく即ち雪の船人わく人向言云與よま
舟々無盡もとと王子歟のまくとて尺すすも又

夷江户沙子

四

十一

牛潟の封疆

三圍 牛潟井 長下寺の邊

○雪
人來遠くもうけたる日ハ老松古木より祀を候せ中壇
雪窓の流也ハ高麗川也て芦間ご柳也小舟
豆根の灰をやどぐ一都邑ハ霜色と墜せり傍の竹
まくらも霜霜とてそくらむくら

舊題

あらわす枯葉の芳をなうまで後はもつともひむ

○封疆禮記月令云王命布農事命田舍東郊皆終封
疆審端徑術矣○封塊拾遺錄云禹治水所穿鑿
處皆青泥封記被玄龜印其上今人聚之爲界
乃遺事也此封塊之始也

題林雪

長下寺の北山の有るあり雪は花

菊岡布仙

雀下菴自書

續江戸砂子附録

一日同志十餘輩雀下菴ニ會シテ俳談刻々移入時
座間ノ一客一書名勝ナ出シ師ニ示シテ曰此書ハ頃
日金昔ノ門戸ニ貼シテ廣ムル處ノ冊子ナリ其趣ヲ
見ルニ師ノ著スコロ名跡志ト大同小異ノミ其同
處ハ神社寺院名勝古跡又異ナル處ハ師ノ説ヲ難
鑒説フル而已シカモ魚魯ノ誤リ甚多シ説ニ云自
吾子カ言過リ吾子專ラ勝心ヲ挾ム敢テ丈夫ノ悦
脚ヲ蔽シテ他ノ腫足ヲアラハス者ナリト云師曰
ヨフ所ニ非ヌ抑彼書始メニ廊廟ノ原始アリソノ
考索甚夕詳ニシテ終リニ考異辨正アリ疎謬ヲ責ム
ルニ筆ヲ以テ夏楚トス予速ニ其指点スル處ノ錯誤
ヲ改削セハ彼ノ書ハ吾カ德ヲナシ我ヲ生スル者ト
ヒトシ予ニ於テ幸ノ甚シキ也但黃雲ノ難ニ至リ六

其ノ言福徳イワユル鉏商力獲ヲ以テ不祥トスルノ論ナリ是予カ著述ノ流布ニ憎嫉スル意ヨリ起リテ枉テ論ヲ設ケタル者ヲラニ然レトモ是ヲ以テ虚懷ニ納テ彼書ト較ヘンコト欲セズ何ソ其是非ヲ論セシマ。魚路カ云師ノ詔誠ニ如リシヤレハ彼書ニライテ黄雲ノ二字ヲ難ジテ不祥トシ吳國倫カ詩等ヲ靠證トシテホシイテニ師ヲ難ス門人何ゾ口ヲ閉テ止ニヤ辨明セスニハアルベカラス彼書ニ黄雲、佳氣ニアラスト古詩古語ヲ引テ終リニ惜哉或書ノ作者新奇ノ語ヲ撰、ニトシテカヘツテ此瑕類ヲ致ヒル事況ヤ大城ノ美ヲ頌セントシテ此忌憚ラリル語ヲナセルハ何ゾヤト書リ被人ノ難スル所甚シキ鑿詭ニシテ撰者モ亦無稽ノ誤リ大ナルカ十己ニ會トキハスナハチ嗟諷ニ我ニ異ナル時ハ沮棄スルハ君子ノ為ガル処

ナリ况ヤ廊廟ヲ頌シ奉ルノ語ヲ穿鑿ノ強テ不祥ノ語トシ師ノ編スル處ヲ取リテ已レカ撰トシ刻板行スルニヨツテ世ノ邪正ヲ知ル人ノ若クハ師ノ豈平常ノ事ナランヤ一時リス處アリテ云ルナルヘニ常ノコトニアラストシ東方朔カ傳モ信シ難シト若シ然ラハ彼ノ引用エル北方ノ寃氣モ明卿カ詩モ師ノ著ス處ノ黄雲ノ一段ハ遺佚翁カ紫ノ一モトニ書タル全文ヲ取リテ新奇ノ語ナスニアラス遺佚翁モ亦一廊廟ヲ頌スルニ何ゾ不祥ノ語ヲ用ヘケン予カ淺陋ナル目ニ一丁ヲ辨セストイヘば渭誓ヲ學ノ事年アリ時、視ル處ノ詫今其ニミヲ擊ケテ論セシ其不文ナル世ノ姍笑ヲ免レカタシト雖邪ニ師ヲ難

スルヲ視テ黙止セニヤ其是非ニ於テ世間平心ノ人自カラ
知ヒシヘシ晋書天文志二十輝ノ法ヲ以テ妖祥ヲ觀吉凶ラ
辨スル事アリ其十二曰黃ハ熟スト又云天子ノ氣ハ内
赤レッドク外黃ニシテ四方發ル所ノ地當ニ王者アルハシト云リ凡ソ
軍勝ノ氣上黃ニシテ下白キテ善氣ト名ク臨ム所ノ
雲互色アル其下ニ賢人隱ルト漢書ニ汾陰ニ寶鼎ヲ得
上ニ黃雲アリテコレヲ蓋フト又觀象カウジヤウ占ニ軍上ノ氣黃
白色ノ者ハ勝トイヘリ又唐代宗即位ノ日黃氣日ヲ
抱ノ瑞アリ或ハ又湯興タケニチ白雲房ニ入舜興タケニ
シテ黃雲堂三升リ語アリ是ヲ湯祥窟端ト称タス吾國ノ
天武天皇元年五月慶雲現ヘヨツテ年号一玉フ慶雲ハ
治平祥瑞ニテ五色ナガミ具フ杜甫カ詩ニモ雲近蓬萊常五
色ト云リモ雲五彩ナリヲ祥トス五色ノ中ヒトリ黄色ラ

脚ケニア 楊德帝ノ天平神護二年諸國ニ瑞雲現ヘ
中二十七月廿三日東南ノ隅ニ雲アリ本朱ノ末黃ニシテ稍五
色ヲ具フト奏ヒシ事アリ此外和漢歷代諸子百家ノ
書抄舉スヘタフヘ遺佚翁々 廻廟ヲ頃クニ語誰カ誤ト
正シタルニ彼書ニ其不祥ノ證トスヘキ語ヲ穿鑿ノ
瑕ヲ求メ其祥瑞ノ證トスヘキ語ハ蔽隱ノ他ヲナース
憶フニ彼ノ論ノ作ル人ハ私意ニシテ獨創トシル倫仙謂曰
僕々筆ハシ開クニ及ハヌト雖少蛙カニ吐クニ凡世間万
般ノ事物彼書ノ如ク穿鑿也何モノ物カムトセサラニ壁言
此時松樹千年終是極ト古詩ヲ引テ不祥トセニヤ何
一句詩章カタタグ之涼宇謂云和歌連俳ト雖七足下ノ
言ノ如ノ各一物ニ吉凶ヲ兼ル例多端ナリ或ハ君ヲ
祝ニ世ヲ賀スニ及ニテハ千鶴万龜チツラ子濱ノ真

砂ヲ十代ノアリカズニセシナト詠シ又哀傷無常ニ讀ム
トキハ空蟬ノ虚世ト云電ノ光ハカナキナリ一物
ニシテ吉凶天地ヲ隔ツ難者ノ非明心ニシテ理ニ達シ
公ニシテ私ナキノ人吾輩ノ辨ヲ待スシテ知ラシム師云
各言トコロ其理トキニアラス予元來大方ノ為ニセス唯
嬰兒ノ玩具ニ等キ草稿ナリ何ソ和漢ノ書ヲ引テ他
ヲ諱シ自ラアケン吾難スル人アラハ等閑ニシテ捨ヘキ
モノナリト是ニ於テ滿座口ヲ閉テ歸

甲寅首夏門人等筆於崖下齋

享保二十年卯正月日

作者 菊岡沾涼

彌工 吉田平兵衛

藤木久市

江戸浅草茅町二町目 須原屋伊八藏板

